

谷戸・谷津の保全と体験学習

角田 巖*・綾 牧子**

The Conservation of YATO・YATSU and the Experience Learning

Iwao Tsunoda, Makiko Aya

はじめに

丘陵、台地に平地が切り込んでいる特有の景相は、谷戸、谷津などと呼ばれている。この狭隘だが豊かな恵みにあふれた地形は、長年に渡って複雑な人と自然との共生の営みを築いてきた。しかしながら、人が自然を利用して経済的發展を第一とする現在社会においては、谷戸・谷津の存続は負の弱さを宿命付けられていた。谷戸・谷津は土地としての生産性が低く、またその土地の利用には、人は過重な労働力を強いられてきた。しかしながら、人が環境的な自然を失いつつある現在において、さらに人の内なる自然をも危機にさらされている状況から、人々がある問いを谷戸・谷津における保全活動において投げかけているように思われる。それは、日本人にとって歴史を通し自然がかけがいのないものであったと同時に、自然もまた人とともに生きてきたのではないかというという視点である。

谷戸・谷津はその生産性の低さや農業の変化、市街化などによってその多くが失われ、あるいは荒廃してきた。しかし、近年の国と地方自治体による里山保全の動きや市民の保全活動の一環の中で、谷戸・谷津もその豊かな自然環境が注目されてきた。そこでの優れた生物多様性は、市街地区の近くに残されたビオトープとして、人々に身近な自然を提供してくれる。農業生産者と市民の交流から体験学習の場が提供されてきている。そして、地権者、ボランティア団体、行政のパートナーシップから新しいタイプの保全活動が運営されている。そこでの体験は自然の恵みを中心とした手作りの生産、創造活動であり、四季をめぐっての自給自足的な、循環的なプログラムが実行されている。現代社会の孤立的、消費的なレジャーに対して、コミュニティ内とコミュニティ間を構築する、小規模だが密度の濃い村落型のオルタナティブ（現代消費社会に対して循環型社会を選択、志向する）なシステムが作られようとしている。

* つのだ いわお 文教大学人間科学部

** あや まきこ 文教大学人間科学部非常勤講師

I 谷戸・谷津の自然

谷戸・谷津とは、丘陵地、台地が湧き水、水の流れによって侵食、開析され、浅い谷となって樹枝状に刻まれている地形である。谷は大地から流れてくる水によってよりも、「地面にしみこみ、湧き水となって大地斜面の下部から流れ出した雨水が湧き出し口の土をえぐっていき、しだいに湧き出し口が奥へ奥へと後退して」¹⁾発達していった。中でも、湧き水によってえぐり取られた土砂が溜まり、平地が広がっていったものは谷津と呼ばれる。

谷戸・谷津はこの他にも地域によってさまざまに呼ばれている。山田によれば関東での特有の名であり、ヤト（谷戸、谷）、ガヤト、ガイト（ヶ谷戸、谷戸）、ヤツ（谷津、谷）、ヤチ（谷地）、ヤ（谷）、サク（谷）、タニ、コク（谷）などの名称がある²⁾。ヤツは千葉県、茨城県に、ヤトは神奈川県に多いと言う。ただ、鎌倉は66ヶ所ほど谷戸という地名があるが、ここでは単に山襲と山襲の間の谷地をさしている場合もある。それは、鎌倉の町が山を切り開いて造成されてきたという経緯があると言われる。

谷戸・谷津は、段丘上部と段丘中腹部（段丘崖）、そして谷部によって構成されている。谷頭には湧き水が生じるが、それは段丘崖に密生する自然林、二次林に涵養された雨水によるものである。

中村によれば、谷戸・谷津の地形の原形は、10万年以前の関東地域が浅い海に覆われていた（古東京湾）が2万年以前の陸化によって各地に残された無数の谷である。その後、関東一帯は再び海に覆われ、さらなる海退によって谷地状の低湿地が数多く出現したということである³⁾。当時では、浅谷周辺の平野面は沖積上部砂層からなり水稲作には向かないが、谷の湿地内では一年を通じ湧き水が生じていることから、弥生時代の前半ごろから「埋積浅谷の湿地こそ、自然灌漑の可能な水稲作の適地として評価されていた」⁴⁾と指摘されている。以後、平野部での稲作が主流となっていくが、なお現代にいたるまで谷戸・谷津での稲作が続けられてきた。これが谷戸田・谷津田である。谷戸田は谷が小さく棚田状に作られ、田から田へと「田ごし排水（灌漑）」が行われることが多いのに対して、谷津田は谷低地が平坦であるということから用水路を利用した「用排水分離」になっているのが特徴である⁵⁾。湧き水が冷たい場合には、稲の生育のために溜池、温水路が作られる。多くは平野での水田に比べ、その狭さから機械より人手の労力がかかり、かつ湿地（どぶ田）のため耕作には苦勞が多い。結果的に生産性が低い田であると言われる。

最小単位の谷戸・谷津は互いに樹枝上に連なっていて、丘陵の樹林地帯に覆われている。そしてまた、里山とも近接し、谷戸・谷津と里山とが交互に接続している景観となっていることが多い。そのため谷戸・谷津では「囲われ観のある景観（圍繞景観）」があり、それが「自然に包まれた心地よさを感じさせる要因となっている」⁶⁾。このように、谷戸・谷津は里山、農村集落と連なったまとまりの谷戸・谷津自然であり、かつ市街地に隣接する残された貴重な自然である。

里山、村落と連なっている谷戸・谷津は、生物にとって長年にわたって好ましい生息環境を提供してきた。丘陵とその丘陵崖に茂る雑木林は、落葉樹のみならず、多くの針葉樹、照葉樹を含み、1年中生い茂り、花が咲き、実をつける。また、四季を通じ途切れることない湧き水は、生物に命の水を提供する。さらにこれらが連なる緑のコリドーは、生物の移動と往来を可能とさせ、広範囲のビオトープを形成している。このことから、谷戸・谷津での生物の多様性は非常に高いと指摘されている。例えば、里山と田との間に存在する裾刈り場（草地）は急斜面であり、植物

の生育条件としてはさほど適地ではないが、そこには「面積が保全地域全体の0.018%であるにもかかわらず、出現植物種は全体の33%にあたる227種が記録された」⁷⁾というように植生の密度が濃い。また、動物に関しても各地の谷戸・谷津において希少種を含め、多様な生物の存在が確認されている。

谷戸・谷津における自然林、二次自然林は水の涵養を行い、この水は湧き水となって、田への用水、灌漑として使用されている。これらの林は、かつては農業の作業場であり、草木肥の提供、シイタケ栽培、薪、炭作り、山菜狩などが行われ、人手による枝打ち、伐採更新、下草刈など一定の管理と攪乱によって保全されてきた。里山同様この自然は人と自然との共生によって成り立ってきた原風景とも称される二次的自然である。

II 谷津・谷戸の保全活動

近年、減反政策、農業の近代化、従業者の高齢化、後継者不足による農業人口の減少などによって、日本の農業は大きく変化してきた。特に谷戸田・谷津田は、耕地面積が狭く、入り組んだ土地の形態のため機械を導入しにくく、人手によるところが大きい。そのため、生産性が低い。これらのために放置田、休墾田が増え、谷戸田・谷津田は荒廃してきた。さらに、市街化により相対的に土地の価値が上がり、相続税のために手放さねばならないという事態も生じてきた。そして周辺の都市化に伴い、より効率のよい、経済的価値のある土地利用へと向かっていった。その上、人の目に見えにくい場所であることから、産業廃棄物の不法投棄の場所ともなったところも多い。

一方で、グローバルには地球の温暖化対策のための緑地保存、地球サミットでの「生物多様性条約」の設定があり、日本においては2003年に環境省の「生物多様性国家戦略」により里山里地の保全と持続可能な利用方針が施行された。これと平行して、各地方自治体において施策と保全事業が展開されていった。

(1) 千葉県、市での保全政策

県では「里山の保全・整備及び活用の促進に関する条例」が施行されたが、すでに千葉市では、かつて130ヶ所あった谷津田は63ヶ所に減少していた。市は「野生動植物の保全施策指針」(1999年)を出していたが、2003年に「谷津田の自然の保全に関する調査報告」(千葉市同名の調査委員会)を行った。これに基づき、以下のような活用目標を掲げ、谷津田の保全に着手した。

- ・谷津田の一体的なまとまりや連続性、微地形を保存する。
- ・水源涵養林としての健全な樹林池や湧水池を保全するとともに、集水域の浸透性を高め、表流水を利用して、水環境を保全していく。
- ・谷津田、斜面林、台地部の樹林や畑からなる一体的な土地利用と多様な要素の配置や秩序を継承する。

そして、生物の生息環境を整えること、市民参加による協働的な活動の推進、総合学習の場の提供、農業者と市民の連携、体験水田のプログラムの実践などを掲げている。これらによって循環型社会のビジョンを描いている。また、各地での行政と農家、市民の取り組みから、保存状況のパターン化を行い、それに基づいて各谷津田のきめ細かい保全計画を提唱している。

1999年には「ちば・谷津田フォーラム」を開催し、谷津田の現状調査(100選登録)、谷津田

マップの作成、保全対策、観察会、シンポジウムなどを行った。下大和田谷津をベースにして、観察とゴミ拾いを重ね、「下大和田、夢計画」と銘うって多彩な活動を繰り広げた。米作り、いきもの探検、餅つき、オブジェ作り、どんど焼き、ネイチャーゲーム、収穫祭、谷津田図鑑の作成、森の遊び場作りなどが行われた（「ちば環境情報センターニュースレター108号」2006年7月）。

また、「ふるさとの谷津田」プロジェクトでは、調査の後200年に西毛地区の谷津田をこれに指定した。ここでは、子どもの自然体験フィールドとして活用が期待された。

2002年策定された若葉区「大草田いきもの里」では、ニホンアカガエル、ヘイケボタルなどの希少生物の保全と田んぼ作り、森作りなどが体験できる。人材育成のためには育成講座が設定されている。また、セルフガイド方式のインタープリテーションにより自然観察ができる。管理運営は、地権者・地元住民・市民団体の連携で行われる（千葉市環境保全部）。

佐倉市においてもシンポジウムが開かれ、「田んぼの会」が自然観察を行っている。下志津田沢では、市民の憩いの場、総合学習の場として、自然公園の設立を目指している。直弥公園は観察路が整備され、ボランティア団体によりビオトープ整備が進んでいる（佐倉市環境政策課）。

茂原の農業高校では、測量・環境調査、池、ブリッジを作り、放棄水田の復田整備に取り組んでいる。

我孫子市では、手賀沼と周辺の谷津田の保全のために「谷津ミュージアム」の建設の事業に着手した。昭和30年代の農業環境の復活を目指し、「農業・自然・暮らし」を統合的に捉え、生物の生息環境の保全と伝統農業と文化を新たに継承・発展させながら、「谷津守人」の人づくりを押し進めていこうとする雄大な構想である⁹⁾。

(2) 東京都での保全対策

都は、1972年に「自然保護条例」（2000年改定）を定め、里山の保全地区を設けた。また、町田市における農業と歴史遺産、自然保護との共生を図りつつ土地利用を持続させていくために、1978年に「図師小野路歴史環境保全地域」を設定した。町田市には、境川、鶴見川、恩田川の上流があり、谷戸地形が多く形成されている。この地区の谷戸は従来から農業の営みによって保全されてきた。そこで、1996年に「町田歴環管理組合」に谷戸管理を委託した。この方式は国内でも稀であるようだ。稲田の継続による保全に加え、水田はないがビオトープとしての環境づくりも視野に入れている⁹⁾。

町田市としては、緑地保全対策として「多自然型整備」を目指し、様々な施策を行ってきた。自然と歴史文化を一環として捉え「谷戸山環境文化」の継承と推進を目指している。キーワードとしては、「生物多様性ガイドライン」、「生物の回廊」、「環境パートナーシップ」、「グリーンラスト制」、「町田エコプラン」などを掲げ、豊かな自然環境に恵まれたアメニティを創ろうと試みている（「町田市環境基本計画」2000年）。

稲城市では上谷戸緑地体験学習館を作り、緑地での市民の自然体験活動と住民活動の推進を目指している。ここでは、「指定管理者制度」という民間委託方式をとり、現在坂浜自治会が管理している（「わかほなネットワーク」<http://verdure.s170.xrea.com/xp/modules/wordpress/index.php?p=133>）。

多摩地区では、「多摩地域の谷戸の保全に関する調査」（2002年環境局自然環境部）が行われた。この地区では404ヶ所の谷戸が確認された。注目すべき指摘は、多摩地域の丘陵に広がる里

山を「里山回廊」と位置付け、さらにこれを三浦半島と関東山地にまで広げていくという視点である。これは、三浦半島から東京西部に広げた緑地の「いるか丘陵ネットワーク」の構想に似ている。小山田緑地神明谷戸は、野生動物の保護地区となっていて、立ち入りが禁止されている。あきるの市の「都立小峰公園」は、谷戸の景色が楽しめるハイキングの場となっている。

(3) 神奈川県での保全対策

県内には数多くの谷戸が残されているが、都市化によりその存続が危ぶまれてきた。各市では市民の憩いの場として緑地の保存に努め、同時に、市民の側からは自然体験ができるような従来のままの谷戸、里山の保全を要望した。そのためには行政と市民、地権者との間のコミュニケーションと協力が欠かせなかった。

①川崎市

市には生田緑地と多摩特別緑地保全地区があり、1983年から継続的に自然環境調査を行っている。生田緑地は谷戸を含んでいるので、多様な自然体験活動が可能である。かわさき自然調査団では植物班、シダ植物班、地学班、野鳥班、昆虫班、クモ班、キノコ班、水田ビオトープ班を作り活発な活動を行っている。ビオトープ班では田圃再生活動で成果を挙げている。この谷戸には「生田緑地ホタルの里」があり、ゲンジボタルの観賞ができる。また、自然探勝路では森林浴を楽しむことができる（「かわさき自然調査団」<http://home.a03.itscom.net/nature23/biot.html>）。

生田緑地の一部には「とんもり（飛森）谷戸」が1996年から初山地区の住民を中心としたボランティア団体によって保全されている。里山づくり（下草刈り、川掃除、ゴミ拾い、間伐）、ゲンジボタルの育成、子どものためのクラブでは観察会、昆虫採集、ツリークライミングができる遊び場作りを行っている。さらに、「森のコンサート」がかがり火の中で開かれ、その後にホタルの観賞がある。この地区で注目される点は、ゴルフ場とのつながりである。ゴルフ場内には谷戸の水源である湧き水があり、この用水路にホトケドジョウやヨシノボリが生息している。両者の間でサンクチュアリとしての保全に協力しているとのことである（「飛森谷戸の自然を守る会」http://www.geocities.jp/ikuta_ryokuchi/tonmori/tonmori.html）。

②鎌倉市

「鎌倉中央公園」の建設に関して、敷地内に存在していた谷戸の保全には小さなボランティアグループの努力があった。子育てグループの「なかよし会」は山崎の谷戸で、ドイツの「森の幼稚園」のような青空保育を行っていた。1990年に公園の基本計画が発表され、ここでは、谷戸の水田がキャンプ場として整備される計画であった。会は「山崎の谷戸を愛する会」を発足させ、市へ要望書を提出し、谷戸の保全を実現した。以後、保全活動の他、田んぼ修行、谷戸講座、観察活動、工芸、炭焼きなどを行っている。計画段階から市民が参画し、粘り強く行政との折衝を重ね、行政とボランティア団体によるパートナーシップによる管理運営を築いてきた¹⁰⁾（及び「里地通信」1999年12月号、里地ネットワーク事務局）。

「広町の森」も複数の谷戸があり、市民の声によって保全されてきた。多様な生物に恵まれていることから、観察会が行われ、都市林公園としての保全が検討されている。

③横浜市

青葉区の「恩田の谷戸」も地域の人々の力によって残された。原風景としての谷戸を21世紀の子どもたちに残したいという願いの元に、地元の市民と地主との互いの理解がベースになって実行された。畑班、水辺班、歴史班によって、生物調査、炭焼き（伏せ焼き）、古墳、横穴墓の

保存運動などが展開された。地主の許可を取り、農地の一部のある小川を復元しゲンジボタル、ホトケドジョウなどの保存を図った。民有地であるために、市民が稲作や畑作、環境保全に積極的にかかわることで地権者の理解が得られてきた。また、都市における谷戸の農地を保全するためには農家に対する所得保障制度の優遇措置「デカップリング」が必要であると、要求書を市に提出した。ここでの谷戸保全の活動の特徴として、歴史、民俗研究を組み入れていることである。谷戸を地域の文化に位置づけていったことが注目される¹¹⁾。主な体験としては、前述の他に稲作、谷戸作業、アメニティ植樹祭、バードウォッチング、ホタルパトロール、谷戸鍋、どんど焼き、自然学級、うどん打ちなどである（「恩田の谷戸ファンクラブ」<http://www11.cds.ne/~onda/event.html>）。

都筑区の「都筑中央公園里山倶楽部」（ばじょうじ谷戸）では保全活動の他、サトイモ収穫、キノコ調査、ハロウイン・ランタン作り、竹炭焼き、地越し・落ち葉かき・焼き芋、お正月遊び、カブト虫の里親、里山講座など多彩に行われている（「都筑中央公園里山倶楽部」<http://www1.tmtv.ne.jp/~satoyama/nenkan`s.html>）。

「仏向・市沢の谷戸」では、行政との協働、地主との交流により、小川アメニティをスローガンにして、環境調査・保全管理、環境教育、ネットワーク作りなどを行っている。横浜の中心部にありながら、帷子川にはゲンジボタルやホトケドジョウが生息し、「たちばなの丘公園」（仮称）建設の予定地である。体験活動のアクティビティは上記の「里山倶楽部」に似ている（「プロフィール」<http://www.yato.net/profile6.htm>）。

緑区には約36haある広い「四季の森公園」がある。住宅街にあるが、谷戸の起伏が生かされた自然観察路が完備されている。しゃぶしゃぶ池、ふるさとの森、山の広場、あし原湿原、不動の滝へと続く。大きく自然林ゾーンと里山ゾーンに分けられている。炭焼き小屋では炭焼きの体験ができる（「四季の森」<http://www.gofield.com/trekking/kanto/t0097-yokohama/>）

青葉区には奈良川流域に「西谷戸」、「土橋谷戸」があり、「奈良川流域を守る会」が保全活動を行っている。この地域には、ハヤブサ、ノリス、ツミなどの猛禽類が見られる。また、ゼニタナゴが生息し、その保護に努めている。その他、生物の観察会、手作りの竹炭による水質浄化に取り組んでいる（「丘の街発」http://kit.tele.co.jp/kita/aoba/weekly/rensai_okanomati_5.html）。

さらに整備された「寺家ふるさと村」が町田市三輪町にまたがってある。ここの谷戸は横浜市の「ふるさとの森」の一部に組み入れられている。総合案内所「四季の家」では生物生息や寺家の文化についてのインタープリテーションが行われている。稲作などの貸し農園には百数十人の利用者があると言う。中学生のための稲作体験、農産物の直売、陶芸教室、茶道用木炭生産などがあり、運営は地元の住民による委員会で行われている。また、お店も立ち並び、一般利用者の訪問も多く、街のような体をなしている（「里地ネットワーク」http://satochi.nt/project_0118.html）。

戸塚区の「舞岡公園」は市民による谷戸保全と利用に関して他地域の模範的な谷戸公園となっている。この地域は起伏に富んでいて、古くから数多くの谷戸が存在していた。現在の公園は横浜市の管理地になっているが、1983年に着工され、1993年にオープンした。計画段階から市民の声が取り入れられ、行政と市民とのパートナーシップで作られてきた。実際の運営は市からの委託により公園内の田園体験区域（3.4ha）を「舞岡公園を育む会」（約350名）が行っている。公園全体としては現在約5百の団体（約1000人の会員）が活動している。主な活動としては、谷戸保全活動、観察会、稲作、しいたけ作り、炭焼き、草木染、茶摘み、梅干作り、味噌作り、稲ワラ細工、竹馬作りなどが行われている。また、公園内の市指定の「小谷戸の里」では明治時代

の古民家が保存されている。ここでのモットーは、「持ち出さず 持ち込まず」である。ここで作った米は敷居内で食べるとのことである。この地域での最も興味深いことは、谷戸の公園の中で寄り合った人々が家とは別の新しい村落的なコミュニティを営んでいることである。このことについては、まとめとして後述したい（「舞岡公園ガイド」<http://myhill.wetwing.com/guide.html>、「谷戸の保全を通じたコミュニティの創造」<http://web.kyoto-net.or.jp/org/gakugei/judi/forum/forum8/zi029.htm>、丸橋裕一）。

神奈川区の矢上川流域では、ホテルが生息できる「大蔵谷戸公園」の建設が目指されている。

④座間市

ここには神奈川県立の「座間谷戸山公園」がある。かなり整った大掛かりな里山公園である。園内の行路が里山の自然行路、谷戸の自然行路、雑木林の自然行路へと導かれている。そこには、水鳥の池、わきみずの谷、湿生生態園、木道、クスギ・コナラ林、シラカシ林、里山体験館がある。豊富な自然観察ができる他、バードウォッチング、稲作体験、ネイチャーゲームなどのアクティビティがある（「谷戸山公園」<http://joy.poosan.net/kawagoka/zama/yatoyama/yatoyama.htm>）。

⑤横須賀市

横須賀市は丘陵地が多く、数々の谷戸地形が存在していた。近年丘陵地の開発による宅地化が進んでいる。市では谷戸の景観を残しつつ、市街地の環境づくりを計っている。特に、傾斜地山林の環境悪化につながる開発の抑制、谷戸の環境保全、緑地保全地区の指定などを計画している（「横須賀市谷戸の環境改善」<http://www.city.yokosuka.kanagawa.jp/j/plan/tosimasu/yato/>）。

⑥逗子市

市内には「久木内越谷戸」があり、宅地開発の企業地となっている。ここは、広大な森にオオタカ、ハイタカ、ノスリ、ハヤブサなどの猛禽類が生息し、24科48種の鳥類が存在すると指摘されている。市の買い上げによる保全への住民要請が行われている（「日本野鳥の会 神奈川支部」<http://www.mmjp.or.jp/wbsj/k/new/00nen/nagosi.htm>）。

(4) 埼玉県での保全対策

県内には、狭山丘陵が広がっており、丘陵の中央に谷戸地形の「西久保湿地」がある。この湿地には、トウキョウサンショウウオやゲンジボタルが生息し、ハンノキが生えている。また、埼玉県の蝶「ミドリシジミ」も生息している。

「狭山丘陵を市民の森にする会」丘陵の保全活動が展開され、その後県の借り上げが決定された。また、トトロ財団による、里山トラスト運動が起こった。

このトラスト地に隣接する谷戸が一般廃棄物最終処分場の候補地の一つになっているということで反対運動が起こっている（2006年）。埼玉県では数少ない谷戸であり、その存続が望まれる（「西久保田んぼのあらし」<http://www.ictv.ne.jp/~zephyrus/aramasi.htm>、「狭山丘陵の谷戸をまもろう」<http://www.tvac.or.jp/di/7656.html>）。

Ⅲ 谷戸・谷津での体験活動

これまで谷戸・谷津を保全から見てきたが、ここでは、体験と体験学習の立場から考えていきたい。谷戸や谷津では、保全の活動と体験学習の活動とはその多くが重なり合う。ここではどのような体験の学習対象があり、各体験がどのように関連付けられているのかを検討する。このことによって谷戸・谷津での体験学習の意義を明らかにしたい。

体験学習は、計画―体験―表現―評価―終了または修正と再計画というようなステップがあり、場合によっては体験が繰り返されることもある。谷戸・谷津でのほとんどの体験は循環され、繰り返されていく。なぜなら、そこでの最も重きが置かれる体験は保全活動であり、保全は継続、循環されていかなければならないからである。それぞれの体験は、この谷戸と谷津の保全という全体的な相に関連していることで意義付けられている。

(1) 保全体験

谷戸・谷津の自然は、里山、村落と連なる二次的自然として成長、継続してきた。人々は農業や生活のために自然を利用してきたが、自然もまた人の手を借りることで一定の継続的な生存を続けてきた。里山、谷戸・谷津の自然は、人との共生によって成り立っている。

(2) 環境調査

谷戸・谷津は里山、村落と連なっており、それぞれ異なった環境状況にある。周囲の地形、関係状況、森の健康度、水環境、水質、生物の生態系や植物相、動物相および生育環境状況などが調査され、各谷戸・谷津の保全対策が講じられる。また、土地をめぐる地権者や管理者の状況や周辺住民の意識調査も必要に応じて行われる。環境調査は、定期的に行われねばならないが、小規模の谷戸・谷津では自然観察時に兼ねられよう。

(3) 植生管理

谷戸・谷津の命である絞水、湧き水は、周囲の森の雨水涵養に依存している。そのため、多くの体験がこの保全活動とかかわる。森の間伐、伐採、枝打ち、下草狩り、笹打ち、落ち葉かきなどの作業は、森の地面にまで適度な陽射しを送り込み、森の新陳代謝を促し健康な森の成長と継続を促す。薪作り、炭焼き、竹炭焼き、シイタケ作りなどは、この森作り、谷戸作業ともかわり、同時に谷戸・谷津文化の伝承的な作業の体験でもある。

(4) 稲作

谷戸・谷津の多くが谷戸田・谷津田として存続してきたように、稲作と切り離されない。これまで伝統的な農作業が適切な谷戸、谷津の保全を保ってきた。今後もこれら小規模の農業を行政、住民などが支援していくことが望まれる。

この地での農業の衰退状況にあって、多くの地方自治体が保全の支援や公園化を行ってきている。市民が参加する多くの谷戸・谷津では、稲作体験が行われている。稲作は年毎に繰り返される循環型の作業であり、体験学習として成果を積み上げていきやすい。稲作は人と自然との協同により成り立っていて、自然の厳しさ、恵みを直接的に感じる。原風景としての里山の景観は、まさに稲作や畑を成り立たせていた農村の姿であった。

体験としての稲作でも本格的に行われているところもある。種籾の選別、育苗箱での籾蒔き、堆肥入れ、田起こし、代掻き、田植え、あぜの草刈、田の草取り、水の管理、オダづくり、稲刈り、取り入れ、オダづくり種籾採取、脱穀、籾摺り、後片付け、レンゲ蒔き、籾干しと選別など四季を通じて活動が持続的に行われている。「かわさき自然調査団水田ビオトープ班」<http://home.a03.itscom.net/nature23/biot.htm>、「花咲き村」<http://www.hanasakimura.or.jp/SectionPresen/Yatsuda>。

多くの谷戸田・谷津田では、収穫後餅つきや収穫祭を行っている。また、生産ベースでの稲作ではないので、無農薬の米作りに挑戦している所も多い。霞ヶ浦近くの石岡市東田中の谷津田では、取れたお米を地酒メーカーに依頼してオリジナルのお酒を造っていると言う (<http://www.kasumigaura.net/asaza/staff/2004/05/15.html>)。

(5) 特定生物の環境整備

谷戸・谷津は、複雑な地形と里山、村落と連なり、かつ谷戸・谷津の形相が丘陵、森、溜池、用水路、水田、裾刈り場によって成り立っていることで、優れて生物多様性に富んでいる。谷戸・谷津の保全自体が生物の生息環境（ビオトープ）の整備でもある。従来は農業従業者によって谷戸・谷津の保全が適切に行われてきたが、様々な事情により稲作の継続が困難な場合には、湿性地としての環境保全が行われる。この場合、多くが生物の多様性のみならず、特定の希少生物の育成、保全がクローズアップされて謳われる。八王子市「川口の自然を守る会」では、地権者の協力により、陸化しつつある谷戸の休墾田を復元し、トウキョウサンショウウオ、ヤマアカガエルの育成に努めている¹²⁾。長岡市の国営越後丘陵公園の谷戸田では、クロサンショウウオ、ヤマアカガエル、モリアオガエルの繁殖環境の復元が計られている¹²⁾。トウキョウサンショウウオについては、2006年都が初めて里山保全地域に指定したあきるの市「横入沢」の谷戸保全のシンボルであった。耕作放棄された谷津田を利用して、「トンボ公園」作りが、末野、折原、男衾、金尾、風布の各地域で行われた。シオヤトンボ、オオシオカラトンボ、ヒメアカネ、オニヤンマ、カワトンボなどの育成が目指された¹³⁾。

葉山では、唯一残された谷戸のため池を「葉山メダカの会」が復活させた。

(6) 文化、歴史活動

谷戸・谷津にかかわるすべての保全活動が自然と人が共生する谷戸・谷津の文化活動と言えよう。谷戸・谷津という特有の地形の中で存続してきた文化である。その中で、特に谷戸・谷津の自然を素材を使用し、市民の体験学習として行われているものとして、前述の保全活動に加え挙げられるものは次のようなものである。まず、稲作、畑作、餅つき、うどん・そば打ち、鍋パーティー、炭焼き、竹炭焼き、伏せ焼き、アースクラフト、草木染、味噌作りなどである。イベントとしては環境調査、収穫祭、どんど焼きなど地域の祭り、観察会、植樹などの谷戸・谷津作業、ホテルなどの観賞会、販売会、コンサートなどがある。広報活動としてはネットワーク作り、解説板などインタープリテーション作り、行政のイベント参加と発表、講演会・学級開催、マスコミへの報道、請願・要望書提出・話し合い、地主との交流などであろう。歴史・民俗の学習活動は恩田の谷戸の古墳保存活動の他、あまり見られない。しかし、谷戸・谷津は弥生時代からの遺跡であったところが多く、各地で発掘調査が行われている。今後はこの面での関心も高まるであろう。特に子どもを中心とした活動では、学校での総合学習のための稲作体験、おやき、ネイチャーゲーム、ツリークライミング、遊び場作り、自然観察・採集、生物図鑑作り、クラフト、かし作り、竹馬などの手作りなどが行われている。

IV 谷戸・谷津でのコミュニティ

谷戸・谷津の公園では行政、地権者、市民がそれぞれの役割を担いつつ、パートナーシップの

元に協働している。このような新市民型のコミュニティは、コミュニティスクール、子どもの冒険遊び場（プレイパーク）、および各地のボランティア活動で見られるようになってきている。特に、舞岡公園（前述）での「舞岡公園を育む会」における活動は自主運営力、規模の点で強靱である。これにはもともとこの地において形成されてきた村落の社会関係が基盤としてあったのではないかと推測される。舞岡村は、「丘陵と丘陵に挟まれた小さな谷筋に開けた村」であり、谷戸地形の中で村落の生活が営まれてきた。中村は明治時代以降の村の形態を調べ、「村の起こり、家関係の始まりとして同じ谷筋にあって生活空間を密にする小ヤトの関係があって、それを基盤にクミやシモの関係が成り立つ。さらにその上に最も大きなヤトである村が形成される。小ヤト、クミ（ヤト）、ムラ（村組）、村、そのどれもがヤトであり、同時にヤトの集合体であるという構造を持つことになる。すなわち、谷戸の村は同時にヤトの村でもあるといえよう」¹⁾と指摘している。ここでは谷戸は単に地形をさすものだけではなく、ヤトという基本的な村落社会をあらわしていることになる。そして、村組の共同体として緊密な紐帯を結び、様々な共同作業をなしていたと推測される。このような社会関係が戦後も継続してきたとは思えないが、谷戸地が村落的な社会環境を形成してきたという事実は残ってきたであろう。

しかしながら、現在の谷戸・谷津での人々の結びつきは、かつての村落におけるような家と家の関係ではなく、一個人、一市民の任意に基づく参加と行政、地権者などのつながりである。それは、新しい市民型のコミュニティと呼ばれ得るであろう。このコミュニティの形成の背景には多層な流れがある。まずは、地球温暖化対策と生物多様性条約推進のための地球緑化の大きな動きがある。政府は、これらと環境のアメニティ、生涯教育の観点をも含め、里山保全の指針を示した。そして、各地方自治体では具体的な政策を実施した。自然志向は市民からも潜在的な願望であった。人もまた有機的な生物であり、環境的な自然が衰退しても、生命というものが自然に基づくものである以上、内なる自然は消えることがない。均一化した都市化は人々の自然への憧憬を促した。また、都会での消費的なレジャーやレクリエーションは疲労を癒し、真に平穏な楽しみをもたらし得るものばかりではない。市民のある人々は身近な場所で自然の中で労作する喜びを求めた。一方、谷戸田・谷津田の多くは人手不足、低い生産性、非効率性により、放置され、休墾田になり、あるいは手放された。そのため、谷戸・谷津は荒廃していった。行政は地権者との間で、稲作の継続依頼、あるいはこの地を公園化する方向に向かったが、資金的に限られる。また、その管理と維持の経費もかなりなものになる。行政のアメニティ政策における限られた予算、市民の自然志向、農家・地主の土地管理・継続の困難さ、ここに三者の話し合いの基盤があった。それぞれの負と欠乏は寄り添うことで谷戸・谷津の保全への可能性が開かれた。その解決は各地で異なるが、行政の姿勢と仲立ち、市民の労力を含む参画、地権者の理解と協力、マスコミなどによる広報、地域企業の支援、これらが谷戸・谷津での保全と体験活動の基盤となっている。しかしながら、最大の課題は農業者、地主からの協力である。そのためには我孫子市で行われているようなデカップリングや相続税対策などの支援が必要である。谷戸（田）・谷津（田）を単に経済的な農地としてとらえるだけでなく、緑地としてのアメニティ、生物多様性と希少生物の保全、水の涵養、市民の体験と学習、レクリエーションの場、学校の体験学習、子どもの遊び場などの多機能な視点の下に保全と体験学習が一体化されていくことが望まれる。

引用文献

- 1) 守山弘「むらの自然をいかす自然環境とのつきあい方」岩波書店、1997年、p.20

- 2) 山田秀三「関東地名物語—谷 谷戸 谷津 谷地の研究—」草風館、1998年、pp.20-23
- 3) 中村俊彦「谷津田の自然」『里やま自然誌—谷津田からみた人・自然・文化のエコロジー』マルモ出版、2004年、p.17
- 4) 井関弘太郎「弥生時代以降の環境」『日本考古学2人間と環境』岩波書店、1985年、p.185
- 5) 中村俊彦、前掲出、p.18
- 6) 武内和彦「里山の自然をどうとらえるか」『里山の環境学』東京大学出版会、2001年、p.5
- 7) 北川淑子、山田晋、大久保悟「谷戸地形における下部谷壁斜面下端の草木層の多様性について」神奈川県自然誌資料(26)、2005年
- 8) 石原正則「孫やひ孫の世代へ引き継ぐ我孫子市『谷津ミュージアム』前掲出3、p.107
- 9) 北川淑子「管理組合による里地の自然再生」前掲出6、pp.150-151
- 10) 進藤五十八編集「生き物緑地活動をはじめよう」風土社、2004年、pp.147-161
- 11) 同上、pp.132-145
- 12) 養父志及夫「田んぼのビオトープ入門」農文協、2005年、pp.137-138
- 13) 新井裕「里山再興と環境NPO—トンボ公園づくりの現場から」2007年、p.26
- 14) 中村ひろ子「生活空間としての谷戸・社会関係としての谷戸」『横浜市歴史博物館民俗調査報告第1集 谷戸と暮らし—戸塚区舞岡』横浜市歴史博物館、1995年、p.12